『少年と仔犬』

佐倉尚紀

にわか雨があがり、夏の陽射しが戻ってきた砂利道で、澤村修平はひとりの不思議な少年と出逢う

ポツンと耳元をかすめた雨が、あっという間に叩きつけるようなどしゃ降りとなった。手さげかばんを抱え、澤村はあわててこの郡道沿いの農舎に駆け寄った。長く張り出したひさしが、格好の雨しのぎになる。ホッとひと息ついて、ハンカチを取りだしてみたものの、手に握ったままあきらめた。目を向けた路面の、小砂利でかたどられた細長いくぼみが、あふれた雨水の水路となっている。まるで氾濫した河川の縮図を見ているようだ。

二の腕に張りついた半袖の白いワイシャツ。腕と胸のあたりが、透けて肌色がかったグレーになっていた。濡れたズボンが脚にまとわりついている。時おり降りかかる雨だれを避けるように、軒下に積まれた古い角材と板戸の間に身を寄せ、にわか雨が通り過ぎるのを待った。

にわか雨に通り雨。昔の人はうまく名づけたものだ。

しばらくすると雨音が静まり、大粒の雨も細かくなってきた。絶え間なく降り注いでいた間隔も少しずつ開いてくる。

（もうそろそろ・・・）

ひさしから頭ひとつ出して、徐々に明るさを増してきた空を見上げた。

雨があがると虹が出た。

広大な緑の稲田から、円周の三分の一ほどのゆるやかな曲線が、まさしく虹色の鮮やかさで浮き上がっている。

それは七色に染まった水柱がほ

とばしっているようにも見えた。

〃虹のふもとには宝物が埋まっている〃

幼い頃そんな話を聞かされた。

霧吹きで虹を作りその地面を掘り返した。何も出てこない、と文句を言うと、すぐ消える虹だからと言い訳けが頭の上から聞こえてきた。

草いきれを感じながら、かばんの水滴を拭いていると、小砂利を踏みしめる人の気配がした。

ランニングシャツに霜降りの半ズボンが近づいてくる。日焼けした少年だった。傍らに茶毛の仔犬を連れている。少年の左手には小さなバケツが、そして右手には細い一本の竹で出来た釣りざおが握られていた。仔犬は、少年に遅れまいと短い足幅でせっせと歩んでいる。

ゴム草履を履いた少年の、帽子、シャツそして半ズボンの濡れ色が、先ほどの雨足の強さをものがたっていた。はみだした髪から、雨粒が伝い落ちてくるのをぬぐおうともせず、澤村の目の前を行く。

「君、どこまで行くの？」

「・・・・・・」

少年は無言で通り過ぎた。

澤村の声には全く無関心の様子である。そして、仔犬も少年に習ってか、見向きもしない。

澤村は彼らの後ろ姿を追った。

少し先を行ったところに、「船川」がある。その昔、農作業時に小舟で行き来したのでこの名がついたものだが、車が普及するに連れ、この川を利用する農家は無くなった。船川は、畳を二枚縦に並べたほどの川幅で、そこには不透明な褐色の流れをまたぐように、古い木橋がかかっていた。

不思議な空間だった。

少年と仔犬は誰もいないかのごとく、自分たちの世界を進んでい

る。

舗装されていない小砂利混じりの郡道には、農作業用の車で削られた窪地が、先ほどの雨でいくつかの水溜りとなっていた。それが、戻ってきたギラギラする陽射しを受けて、白い雲と青い空を映し出している。

近くの畔地には、秋に収穫した稲束を干すハザ木が、均整のとれた高さと間隔で並んでいた。そのハザ木に、セミが、手の届く無防備な位置にとまっているのが鳴き声でわかった。耳の鼓膜を突き刺すような声で、さらに強められた夏の陽射しが身体全体に降りかかってくる。

濡れたシャツの感触が、ほてった肌を心地よく冷ましてくれた。

前を行く少年の感覚が、なぜか澤村にはっきりと伝わってくる。

少年と仔犬が立ち止まって水溜りを覗いている。

そこは、車輪が作った小さな小さな湖だった。

じっと見つめていると、水面下には別世界が広がっているように見えてくる。そして小さな湖が大きな湖になり、足を踏み入れると、すーっとどこまでも吸い込まれていきそうな深い湖となった。それは天と地が逆さになっているようであり、透明の底なし沼のようでもあった。その奥底は見知らぬ町につながり、そこに見知らぬ人がいる。そこもどんどん通り抜ければ、ふんわりとした雲の中。その雲をかき分けかき分け青い空を舞う。

そこまで行ったら、あとどうなるのだろう？

地球儀をキリで穴を開け針金を通したら反対側の国に出た。きっとこの湖もくぐり抜けると他所の国につながっているのだ。少年の

目には、湖に映る風景から何ら矛盾も不自然さも感じられなかった。船にも飛行機にも乗らずに行ける秘密の通路だ。こっそり行ってしまおうか。そうしたら父さんも母さんも、そして夏休みがあけたら先生も友だちも、みんなびっくりするだろうな。

でもそれまで、ちゃんと戻ってこられるのかな。戻れなかったらどうしよう。

空の風景と一緒に少年と仔犬の姿も映っている。もしかしたらこの町とそっくりの町なのかも。そうすると自分とそっくりの人間がいるかも知れない。出逢ったらなんて声を掛けたらいいのかな。お互いに入れ替わったら面白いだろうね。

次からつぎへと、とりとめの無い空想が沸いてくる。

なおも少年は見つづけた。

仔犬が暑さに耐えかねたかのように、その湖に口をつけた。

小さな波紋が生まれ、白い雲や青い空を揺らした。少年も仔犬も揺れている。

それでも少年は湖を眺めていた。

農機具を積んだ三輪トラックが近づいてきた。

「あぁ、危ないよ！」

少年はにっこりと顔を向けた。少なくとも澤村にはそう思えた。

トラックが湖をドロドロにして通り過ぎて行った。

少年と仔犬は、走り去るトラックのうしろ姿をじっと見つめている。

トラックが段々と小さくなり、乾いた路面の砂塵に姿を消した。

やがて少年と仔犬は木橋のたもとで立ち止まった。バケツに川水を汲み、手にした釣り糸に小さなミミズをつけ、ポーンと投げいれた。丸い真っ赤な浮き玉がピョン

ピョン上下左右に揺れ、波紋をつくり、やがてすっと静かに直立した。

少年は腰を下ろし、赤い浮き玉にじっと視線を注いだまま、ただひたすら待ちつづける。傍らの仔犬は腹ばいになりながら、ハァハァと息を弾ませていたが、しばらくして近くの葉陰に身を横たえた。ハザ木からは勢いを増したセミの声だけが響いてきた。

どのくらい経っただろうか。

「ホラ、引いてる！」

静から動への瞬間だった。

澤村が声を掛けるのと少年が無言で右手を上げるのとが重なった。糸の先には、小さなタナゴが太陽の光を銀色に反射させながら、前後左右に身体を振っている。葉陰にいた仔犬も傍に寄ってきた。バケツに入れた魚が、飛び出さんばかりに跳ね回っている。それを見ながらまたミミズを手にする。魚の臭いとミミズの臭いが風に乗ってきた。微妙な、なつかしさのある香りでもあった。

再び少年はつり糸を垂れ、そして、また黙々と赤い浮き玉を見つめた。

陽光が、ハザ木や稲葉そして少年と仔犬に注がれている。周りには農作業の人影も無く、ただ彼らだけの空間だった。少年のひたいからは、先ほどの雨粒に替り一筋の汗が滲んでいる。

いつの間にか、バケツには五匹の魚が泳いでいた。

やがて少年と仔犬は釣り果をバケツに、ゆっくりともと来た道を歩き始めた。

「もう帰るのかい？」

澤村は少年たちを眺めながら声を掛けた。

「・・・・・・」

少年は相変わらず無言である。

彼らの後ろに従った澤村は、先

ほど雨宿りした農舎まで戻ったところで足を停めた。
　夏の照りつける陽射しの中で、いつしかセミの鳴き声も少年と仔犬の姿も徐々に遠ざかり、そして、澤村を濡らした雨の痕跡とともに消えてしまった。
　茫然と佇んでいる澤村の視界から、当てられていたスポットライトを消された舞台のごとく、船川も、小砂利の郡道も、農舎も、一つひとつ静かにその像を閉ざしていった。

……………

　この町は、澤村が中学生になる直前までを過ごした町であり、父の生まれ育った町でもあった。父の仕事の関係で郷里を後にした澤村にとって、その後この町に足を踏み入れたのは今日が初めてである。明日は祖父の三十三回忌の弔い上げが行われる。老齢で足腰の弱った父の代わりだった。
　車内アナウンスで「間もなく・・・到着」の声を耳にしたとき、今日とは逆にこの町を離れたあの日、見送りに来てくれた幼馴染が、手を振りながら必死に汽車を追いかけていた姿を、そして、蒸気機関車の汽笛とともに、ゆっくりと流れる田畑や船川の光景が鮮明に蘇った。
　祖父の家は徒歩でも二十分足らずだという。タクシーで行くからと出迎えを断っていた澤村は、駅舎を出ると客待ちのそれに目もくれず、周辺の佇まいをひとつひとつ確かめるようにゆっくりと歩き出す。膨らんだ手提げカバンの重さも気にせず、記憶を辿りながら昔を今に重ねていた。
　十分程歩いたところで、先ほどから路面を濡らし始めた雨がたちまち大粒の本降りに変わった。

あわてて駆け込んだコンビニの、クーラーのほどよい風と肌のぬくもりが、濡れたワイシャツをすっかり乾かし、べたついた肌の感触を忘れさせていた。

ガラス窓からは、雨あがりの舗道をせわしく行き交う車や人の姿が目についた。

買うあてのない、夏のレジャー特集で飾られた雑誌を棚に戻すと、澤村はコンビニを出た。

呼び戻された夏の陽射しが遠慮なく舗道に注ぎ、はるか向こうの路面からは、陽炎がむせかえるように、ゆらゆらと車のテールを揺らしていた。

郡道沿いの「農舎」は、コンビニに変わり、この町の生活空間に溶けこんでいる。

ハザ木は消え去り、街路樹のある都会的な街なみが形成された。

船川は埋められ木橋の姿は跡形もない。砂利道から綺麗な舗装道路となり、道幅が広くなった路面には、もう砂塵の立ち込める素地はなくなっていた。

そして、にわか雨がどんなに激しく降ろうとも、小さな湖は二度と生ずることもない。

完